

P-333

高次脳機能障害支援拠点機関の取り組み

前橋赤十字病院 医療社会事業課

なかい まさえ
中井 正江、奈良場真衣

【目的】障害者自立支援法に定められた、障害者（児）が地域で自立した日常生活や社会生活を営むことを支援する「地域生活支援事業」のうち、特に専門性の高い相談支援事業の一つである「高次脳機能障害支援普及事業」で国及び県では拠点支援機関の整備を進めてきた。

当群馬県においては、当院へ委託依頼があり平成22年6月24日より拠点機関としての相談業務に取り組んでいる。その業務の取り組みを紹介し、平成22年度の相談実績について分析、今後の課題を明らかにしていく。

【方法】平成22年6月24日から平成23年3月31日までにソーシャルワーカー2名が相談にあたった114件について分析する。

【結果】相談形態、主相談者、性別、年齢区分、原因疾患、発症後経過年数、高次脳機能障害としての診断がされているかまた相談内容（複数選択）などについて明らかにする。

【結論】以上の結果より、高次脳機能障害と診断されている方のみならず診断されていない方の相談も受けている。その中でも高次脳機能障害の診断を希望する方については当院では脳外科、神経内科、精神科などで診断ができる体制となっており、その点については期待にこたえられていると考える。しかしながら、治療・リハビリテーションについては、制度的な制約が大きく、期待には答えられていない。今後は潜在的な相談ニーズを掘り起こすため地域の相談機関などを訪問し連携・協力体制を整え相談機関としての役割を果たしていきたい。

P-335

ボランティアのためのこころのケア研修 ～クロスロードを取り入れて～

諏訪赤十字病院 看護部¹⁾、長野赤十字病院²⁾、川西赤十字病院³⁾、安曇野赤十字病院⁴⁾、下伊那赤十字病院⁵⁾、日本赤十字社 長野県支部⁶⁾

しおざわ こずえ
塩澤己寿枝¹⁾、上條 幸弘¹⁾、小平 孝子¹⁾、石橋 絵美¹⁾、大川原憲司²⁾、野村 純子²⁾、今村 楓³⁾、高橋 郁美⁴⁾、稲原 功子⁴⁾、曾根 愛子⁵⁾、細江 久子⁵⁾、内村 辰徳⁶⁾

【はじめに】日本赤十字社長野県支部では、昨年度ボランティアのためのこころのケア研修にクロスロードというゲームを用いた。研修内容と評価を報告する。

【実践内容及び評価】研修は、日本赤十字社の防災ボランティアのためのこころのケア研修マニュアルに沿って実施し、2会場においてクロスロードを行った。クロスロードとは、文部科学省大都市大震災軽減化特別プロジェクトが作成し、災害支援でジレンマを伴う場面について各自が<Yes> <No> を選択し、少人数グループでその理由を話し合うものである。諏訪会場では研修後に受講者18名へのアンケートを実施し、参考になったかどうかを5段階評価した。評価の平均点は、1. 赤十字とボランティア (4.27 ± 0.6)、2. 日本赤十字社のこころのケア (4.53 ± 0.5)、3. 被災された方々への接し方 (4.53 ± 0.5)、4. 防災ボランティアの安全と健康管理 (4.57 ± 0.5)、5. 災害時のこころのケア (4.53 ± 0.5)、6. ロールプレイ (4.13 ± 0.8)、7. グループワーク (4.00 ± 0.9)、8. クロスロード (3.93 ± 0.8) であった。ロールプレイやグループワーク、クロスロードを実施することについては、18名中13名が賛成であった。

【考察】評価が高かった項目は、関心が高く理解しやすかったと考えられる。ロールプレイ、グループワーク、クロスロードは、点数のばらつきがあり評価が分かれやすいと言える。クロスロードの得点が低かったのは、こころのケアに直接結び付きにくかったことが考えられる。実施について7割の人が賛成であるため、今後も内容を検討して受講者参加型の研修を工夫したい。

P-334

院内情報共有ネットワークの構築と運用

深谷赤十字病院 事務部 企画情報課

かない まさひろ
金井 正裕、小松 知治、三井 健一

【目的】病院は多職種が勤務する集合体であり、勤務場所、時間帯が多岐に及ぶため、重要事項を含めた職員間の情報共有が非常に難しい。厳しい経営環境の折、費用をかけずにネットワーク及び必要機能の構築を図り、その活用を促進する

【方法】医療情報系とは別にインターネット系の院内ネットワークを構築

Webサーバーを設置（Linuxによる運用にて、費用の抑制）

情報共有サイト「院内Website」の運用（掲示板や文書、ファイル共有）

無料ソフト利用による施設予約の実施

【結果】定量観察までは至らないが、以前まで紙ベースで行っていた通知類のペーパーレス化が図れた。

各種申請書の電子化により、用紙の取得が事務室に取りに来なくても院内各所で可能となった。会議室等の予約をする際も事務室の台帳へ記入する必要がなくなった。

院内で運用されている共通マニュアル49種のうち、75%にあたる37種類が電子化され、院内Websiteからの閲覧が可能となった。

費用について、院内LAN工事、サーバー設置以外の運用にかかるコストを、市販のグループウェアに頼らず自前で行っているためほぼ無料となっている。

【考察】情報共有の充実とともに、ペーパーレスによる資源の節約や費用の節減を試みたが、実際には現場では紙で印刷したものの入手を希望するケースが多いため、印刷機会（枚数）の減少には至っていない。しかしながら、各自が資料の入手や伝達のために労する時間を節約でき、業務の効率化を果たしていること、従来であれば閲覧を希望しなければならなかった院内各種文書がいつでも閲覧ができることは情報共有に寄与している。今後、掲示板機能等を運用し、事務局である当課を通さずとも職員間での情報発信が可能となるようなツールの充実を図っていきたい。

P-336

看護係長が抱える困難とそれを語り合う会の効果

福井赤十字病院 看護部

ひがしかわ ささみ
東川 佐枝美、石田 克子、渡辺かな恵、朝田 和枝、辻 香織、常見いずみ、毛利 知子、山田由佳里、渡辺加余子

【目的】看護係長は、師長を補佐して管理業務を行うとともに卓越した看護実践でスタッフ看護師のよきモデルたることが求められる。そこには様々な困難があると思われ、我々は看護係長が抱える思いを「語り」、「耳を傾けて聴く」中で自分の行為を振り返り、互いのエンパワメントを図る「語る会」を実施した。その成果と係長が抱えている困難について以下に報告する。

【結果】「語る会」は6人程度を1グループとし、係長として日頃感じている問題や悩みを一人ずつ発表した。メンバーはそれについて質問や感想を述べて、その内容がより明らかになるようにした。時間は一人40分程度とし、会は2回実施、参加者は延べ46名であった。実施後にアンケートを行った。本研究は所属機関の倫理審査を経て承認を受けている。会で語られた困難は、「期待される業務量の多さ」8、「スタッフの指導」8、「上司とスタッフとの関係調整・病棟運営」5、などであり、会を通してそれに対する何らかの示唆を得た者が多かった。自由記載で多かったのは、「他の係長が同じ悩みを抱えていることを知って安心した」であった。

【考察】自由記載に多かった感想から考えると、困難を抱えて係長としての自分に自信がもてずに日々を過ごしていることが推察される。今回実施した「語る会」は、日頃語りにくい「スタッフ指導」や「上司との関係」などの問題を互いに語り聴くよい機会となった。これによって、係長としての悩みの共有ができ、互いのエンパワメントができたといえる。